

妖しの京 弐 ~不赦姫恋~

宇宙 星来

年若い貴族を襲っていた鬼女の騒ぎから、約一月が経った。

優秀な陰陽生である安倍昭昌あへのおきまらによって鬼女は退治されたが、京には未だに厳戒態勢が敷かれており、夜な夜な検非違使けびいしが見回っている。

そしてこの夜も、いつものように二人の検非違使が京を歩いていた。

「うう、なんだって今日はこんな月なんだ」
「まったくだ。まるで血のようだ」

二人が見上げる先には、禍々しいまでに赤い月。不安を掻き立てられる色をした、満つるにはまだ足りぬ月。都を巡回する検非違使は元盗賊や元野党といった荒くれが多いが、それとこれとはまた別だ。

人ならぬものへの恐怖は、そう簡単に克服できるものではない。

「お、おい。あれ見ろよ」

「ああ？」

十字路に差しかけた時、一人が足を止めた。震える

手が指差す方向には、一人の女の姿がある。

ただの女だ、と笑い飛ばそうとして、もう一人は動きを止めた。

こんな時間に出歩く女。しかも供も連れず、顔を隠している様子もない。

動けずにいると、女はゆるりと振り向く。途端に背筋を駆け上がる恐怖。

「に、逃げ」
逃げよう、と思った時には、すでに女が目の前にいた。

煙で作ったようにあいまいな輪郭りんかくで、顔はよくわからない。全身を霧に包まれたような感覚が男達を襲った。

体から急激に何かが流れ出ていくようだった。激しい眩暈とともに意識が遠くなる。

「……に……」
内裏に。

その言葉と甘い蓮の香りを感じたのを最後に、男達は意識を手放した。



「おーい、昭昌！」

珍しく定刻より前に仕事を終え、帰ろうとしていた昭昌は呼びかけに振り返る。そこには精悍な顔立ちに人懐っこい笑みを浮かべる友人の姿があつた。

「夏彦！ 久しぶりだな」

「ああ。今までずっと秩父の山奥にいたからな」

夏彦は薬を扱てんやくりょうつ典薬寮で働いている。今回も薬草を取りに山へ行つていたのである。

「これから久しぶりに市を覗いてみようって思ってるんだ。よかつたら一緒に行かないか？」

「かまわないよ」

取り立てて今日は用事も無い。久しぶりに会つた夏彦と話したいと思つていた昭昌は頷いた。

「で、瑠璃とは進展あつたか？」

門を出て市に向かう途中、突然夏彦に言われた昭昌は激しく咳き込んだ。

「お、おい、大丈夫か？」

「……っ、ああ。にしても、唐突に何なんだ、いったい」「いや、兄としては気になるじゃないか。可愛い妹の行く末が」

「可愛い妹つて……まあ、確かに可愛いけど……」

言つた途端、瑠璃の笑顔が脳裏に浮かび、昭昌は思わず赤面する。その様子に夏彦は穏やかに微笑んだ。

「瑠璃は見鬼けんきだからな。昭昌みたいに守れるやつと幸せになつて欲しいんだよ」

「夏彦……」

異形を見る力、見鬼。その力を持つものは妖あやかしに狙われやすい。そして瑠璃の力は非常に強い。

だが瑠璃はその力を受け入れ、妖をも受け入れている。妖を友と呼び受け入れる心を持った瑠璃は、昭昌にとつても大切な人。守る事に何の抵抗もない。

だが、それとこれとは別問題だろうと眉を寄せる昭昌に、夏彦は意地の悪い笑みを浮かべた。

「それにあれだ。義弟あにとうとになるなら仲いいやつがいい」

「っ、おま、なに言つて！」

「あははははっ！」

耳まで真っ赤になつた昭昌は、笑いながら逃げる夏彦を追いかける。子供のようじゃあ二人。小突き合ひ、笑い合ひながら市へと向かつた。

「なんか、今日は露店多くないか？」

「ああ、俺もそう思う」

二人がやつてきたのは三条大路で開かれた市。いつもは食料と衣といった小規模なものを扱っているのだが、

今日は食器を売る露店や薬を売る露店、大道芸人などがいて非常に賑やかだった。

「まあ、たまにはこんな事もあるさ。夏彦は何が欲しいんだ？」

「軟膏なんこうを入れる小さい入れ物。この間壊してな」

「じゃあ、あそこの店だな」

二人は食器などの道具を売る露店へ向かい、夏彦はいくつか手にとって見比べる。

「見つかったか？」

「あゝ……これが気に入ったんだが。少し高いな」

夏彦が示したのは手のひらに納まるほど小さな壺達。

本来は香かうを入れるらしく、可愛らしい梅の模様が入っている。

「大きさもちょうどいいいなあ……」

「そんなに気に入ったのか？」

諦めきれないというように壺をいじる姿を見て、店主

の男は苦笑いした。

「だったら五つ買えば、ひとつはただにまけてやる」

「買った！」

市の醜味だいじみはこんな駆け引きである。夏彦は袂から取り出したいくばくかの米と引き換えに壺を受け取ると、ひどく上機嫌な面持ちで歩き出した。

「見つかってよかったな」

「ああ！ これで新しい薬が作れるよ」

生まれつき手先が器用だった夏彦は、元服前から薬作りを祖母から習っていた。典薬寮の仕事は天職と言っても良いくらいだった。

あまりに嬉しそうな夏彦の様子に、昭昌も知らず知らず微笑んでいた。

「昭昌？」

この後どうするか、そう言いかけた昭昌の耳に、鈴の音のような澄んだ声が聞こえる。

振り向けば両手に紙包みを抱えた、被き姿の瑠璃が立っていた。先ほどの会話を思い出し、昭昌は動揺して俯く。

その様子に笑いを堪えながら、夏彦は瑠璃の頭を優しく撫でた。

「やあ、瑠璃。ただいま」

「お帰りなさい、お兄さま。昭昌もお帰りなさい」

につこりと笑う姿は無邪気で愛らしい。ふつくらした唇は嬉しげな笑みを湛え、瞳は生き生きと輝いている。

そんな瑠璃に目を奪われつつ、昭昌もやっと顔を上げて微笑んだ。

「ただいま、瑠璃。買い物？」

「うん。お兄さま帰ってきたの久しぶりだから、おいしいもの作ろうと思って」

「お、それは嬉しいな」

破顔し、夏彦は瑠璃の荷物を持つ。

「あとは何か買う物あるのか？」

「ん〜と……」

きよるきよると辺りを見回していた瑠璃は、ある一点で動きを止めた。

「ちよつとあのお店のぞきたい」

視線の先にあつたのは、色とりどりの飾り玉を扱う店だった。先に行く瑠璃の背中を見送りながら、夏彦は昭昌に笑いかける。

「俺は荷物持つてるから、瑠璃の傍についてやってくれ」

「わかった」

素直に頷き瑠璃の後を追う。すでに露店へついていた瑠璃は、いくつかを手にとつて眺めていた。

「お嬢さんは肌が白いから、濃い色が似合うよ」

店主の女がそう言つて笑い、赤みの強い石や深い緑の飾り玉を見せる。

「きれいな……」

飾り玉を見つめてうつつりと呟く瑠璃。その様子に昭昌は目を細め、並んでいる石に目を向けた。

丸玉や管形くだがた、勾玉まがたまに楕円だえん。濃い赤から薄い赤、緑や青に黄色や白。形も色もさまざまな石達が、やはり色とりどりの紐に通されている。

その中のひとつ、濃い青色の勾玉と白い管形を組み合わせて作つた首飾りに目が留まる。

けして派手ではないが、なんとなく目が惹かれる。それは瑠璃も同じらしく、しきりにその首飾りを手にとつて眺めていた。

「それは外国とくこの、唐よりずつと向こうの国で取れた瑠璃を加工したのさ。もちろん、大した物じゃないけどね」

「瑠璃？ 私と同じ名前だわ」

「へえ、あなたの名前も瑠璃って言つのかい？」

「ええ、すごい偶然ね！」

きらきらと目を輝かせる瑠璃の手から、昭昌はそつと首飾りを取る。

「これ、いくらです？」

「昭昌？」

「気に入つたんだろ、買ってやるよ」

瑠璃で作られた首飾り。音が同じものは共鳴し高め合う性質がある。この首飾りを守りとすれば、同じ名の瑠璃を守る強い力になると思つたのだ。

「兄さんいい男だねえ。少しばかりまけてあげるよ」

にこにこ笑う女に支払いを済ませ、昭昌は瑠璃に首飾りを手渡した。

「はい、瑠璃」

「昭昌……いいの？」

「ああ」

瑠璃は首飾りを身につけると、少しはにかんだ笑みを浮かべた。

「嬉しい……ありがとう、大切にするね」

恥らう瑠璃になんとなく昭昌も恥ずかしくなり、二人は顔を見合わせて照れたように笑い交わした。

「あらあら、若いっていいねえ。でもあんまり幸せそうにしてると、鬼がやってくるかもしれないからね」

「鬼？」

聞き捨てならない言葉に昭昌が眉を動かすと、すかさず瑠璃が合いの手を入れる。

「それって、何のお話ですか？」

「なんだかねえ。この数日、このあたりに女の鬼が出るらしいんだよ。会ったやつらはみんな寝込んでしまった。

なんでも、『内裏に』って言ってるらしい。一番軽くすんだやつが、やっとこの間話せるようになってねえ」

喋り続ける女の話の聞きながら昭昌は考え込んだ。
女の鬼。何故か胸騒ぎがする。

この都を滅ぼすまで

唐突に、耳の中に甦る声。

恋に不安を持つ女の心を操り、鬼女として若い貴族を襲わせていた女術者の言葉。

蓮香れんかという、名の通り蓮の花の香りがする女の妖艶な

笑みが、何かの前兆のように脳裏に浮かび上がった。

「まだ、結論づけるのは早いな」

とりあえずその鬼を見つけなければ、何も始まらない。

そう結論づけ、昭昌は女に礼を言って瑠璃とその場を離れた。

「昭昌、やっぱり調べるの？」

「ああ。なんとなくだが、あの女の関わっている可能性もあるし」

「あの女？」

「……あの女術者だ、蓮香という名の」

ああ、と瑠璃は頷く。

「確かに、女の鬼ってあの女が裏で糸を引いているのだね」

「だから調べてみる。どちらにせよ、人に害を与えるものを退治するのも陰陽師の仕事だからな」

星を読み、未来を占い、吉凶を知る。そして不可思議な力を操りこの世の均衡を守る陰陽師。

昭昌はまだ見習いの陰陽生ではあるが、その実力は認められている。

その昭昌が調べるのなら何の心配もないと、瑠璃は安堵したように微笑んだ。

「お帰り」

少し離れた所で二人を待っていた夏彦が笑いかけると、二人も自然と笑顔になる。

「面白い物は終わったか？」

「うん、大丈夫」

「よし、じゃあ帰るか。昭昌もちょっと寄っていけよ」
「ああ」

三人は仲良く肩を並べ合い、市を後にした。



「おや、客人かな？」

夏彦は邸の前に止まる牛車に首を傾げた。

上質の黒漆で塗られた牛車は、一目見るだけで身分の高い貴族の持ち物とわかる。

一応貴族とはいえ、さしたる身分でもないこの邸に何故に来たのだろうと不思議に思う夏彦に、瑠璃はにっこり微笑んだ。

「これ、大納言様の二の姫の牛車だわ。ほら、おばあさまが姉の一の姫と一緒に書を教えていたでしょう？」

「あー、思い出した。そうか、あの二の姫か」

「昭昌は知らないわよね。大納言様の一の姫と二の姫は、おばあさまに書の手ほどきを受けていたの」

瑠璃と夏彦の祖母青音は、美しい文字と優美な歌を作ると言われて、貴族の女性達の憧れの女性である。

結婚は歌のやり取りで決まる事が多いため、歌の上手い女性ほどもてる。そのため上流貴族達はこぞって歌の上手い女房などに代筆させたりするが、青音は自ら習いに来る者に手解きをするだけで、代筆などはしない。

その姿勢が潔く好ましいと、娘を持つ親はこぞって歌を習わせに行かせていた。

「お二人もそうだったのよ」

「ああ、なるほど。じゃあ別に訊ねてきてもおかしくないよな」

相槌を打つ昭昌に頷く瑠璃。

「たぶんおばあさまのところだわ。行きましよう」

「そうだな、行こう」

いつものように門をくぐり邸に上がる。三人は話し合いの邪魔をしないよう、足音を忍ばせて夏彦の部屋に向かった。

しかしその途中、白湯を運ぶ女房が三人を見つけて声をかける。

「お帰りなさいませ、夏彦様、姫様。姫様は、青音様が帰り次第お部屋のほうへ来るようにと」

「なにかしら？」

「何だ？ 呼び出されるような事したのか？」

「記憶はないけど……」

顔を見合わせる二人の後ろに昭昌を見つけると、女房

はにっこり微笑んだ。

「昭昌様も一緒に下さいませ。いま使いの者に呼びに行かせた所でしたので、ちょうどようございました」

「お……私も？」

「はい、陰陽師の昭昌様にぜひともお力を貸して頂きたいのだそうです」

「まずまず話が見えなくなる。昭昌と瑠璃は首を傾げながら、取り急ぎ青音の部屋へ向かった。

「失礼いたします、おばあさま」

瑠璃が一声かけて青音の部屋の御簾をくぐると、円座に座っていた女性が振り向く。

艶やかで長い黒髪の若々しい姿は、未だに貴族達からの求婚があるとされるだけの事はある。ただ、口元に刻まれた微かなしわだけが、年齢をわずかに感じさせた。

趣味のいい朽葉色の袷を纏って背筋を伸ばす姿は凛とした美しさを持ち、顔立ちはどこことなく瑠璃に似ていた。

「お帰りなさい、瑠璃。昭昌殿もお呼び立てして申し訳ありません」

「お気になさらず。何のご用件でしょうか」

昭昌が問うと、几帳が揺れて一人の少女が姿を現した。目鼻立ちのはっきりした顔立ち。美しさの中に感じられる意志の強さ。山吹の袷がよく似合う、豊かな黒髪の少女だった。

「安倍昭昌殿ですね。私は大納言輔徒の二の姫で良子と申します。お呼びして頂いたのは私の話を聞いて頂きたかったからなのです」

はつきりとした口調と物腰。初対面の昭昌に堂々と顔を晒すなど、貴族の姫にあつてはならない行為なのだが、気にする様子もない。

「お伺いいたしますしよう」

仕事となれば一切手抜きはしない昭昌は、用意されていた円座に腰を下ろした。

「おばあさま、私はどうしたらよろしいですか？」

「一緒にお聞きなさい。あなたの力も必要かもしれませんから」

「そう言われ、瑠璃も素直に腰を下ろす。

三人が見つめる中、女房が運んできた白湯を口に含んで唇を湿らし、良子は訥々と話し始めた。

「話というのは、私の実の姉、貴子お姉様の事です。先日父から入内するように言われてから、白蓮尼という尼にすぎるようになりました。そしてその日から、だんだ

んとやつれていつているのです」

入内。帝の妻となり、後宮に入るといふ事だ。上流貴族の娘なら大体はその道を示される。帝に嫁ぎ、皇子を産み、その皇子が天皇となれば、外祖父が実権を握れるからである。

入内は女性の最大の名誉とされているが、他に好きな者がいる姫にとっては苦痛ではない。

尼にすぎるのもその一端とすれば、おかしい点は何もない。何故呼ばれたのだろうと首を捻りつつ、昭昌は思った通りの事を口にした。

「恋煩い、ではないのですか？」

「違いますわ」

良子は強く首を振る。

「昨夜、私は寝ているお姉様から何か抜け出るのを見てしまったのです。何かは煙のように立ち上り、外へと出て行きました。私は慌てて駆け寄り揺さぶりましたが、目を覚ましてはくれません。夜明け前、何か戻ってお姉様の中に消えると、やっと目を覚ましましたのです」

何か抜け出たと聞き、昭昌は眉間にしわを寄せて考え込む。

「今までにそういつた事はなかったのですかね？」

「ええ。お姉様が白蓮尼から香を貰ってくるまでは一度も眠れないというお姉様に渡したらいいのですが、あの匂いが私は嫌いです。私には、あの香が何か関係があ

る気がしてしょうがないのです」

「その香は、今も一の姫の元に？」

「ええ。取り上げようとすると、狂わんばかりに泣き叫ぶので。もうだいたいやつれ果てて、見ているのが辛いほどです」

じわり、と良子の瞳に涙が浮かぶ。

「お父様もお父様よ。お姉様の気持ちも考えないで、勝手に入内を決めてしまうなんて。お姉様は、ずっと昔から好きな方がいらつしやつたのに、無理強いするからこんな事になるのだわ」

「お好きな方、ですか」

「ええ。私にも教えては下さらないけれど、ずっと文のやり取りをしている方がいるのです。昭昌殿、私はもうお姉様にこれ以上傷ついて欲しくないので。どうかお助け下さい」

「わかりました」

昭昌が頷くと、良子はほつとした様子ですすり泣く。

その肩を瑠璃は優しく抱き締めた。

「私も手伝つわ。昭昌、いいでしょう？」

「ああ。その香を少し手に入れてきてくれると助かる」

「わかった、任せて！」

につこり微笑み、瑠璃は良子の背中を撫でる。

「大丈夫。昭昌が絶対助けてくれるわ」

「話はまとまったようですね」

静かな声に全員が青音を見る。口元に淡く笑みを湛えた青音は穏やかなまなざしで良子を見つめた。

「あなたが気をしっかり持たなければ。一の姫を支えてあげられるのはあなただけです」

「はい、青音様」

まだ少し目に涙を貯めつつも、良子は気丈に頷く。瑠璃に礼を言っ立ち上がると、昭昌に向かつて頭を下げた。

「お姉様の事を、よろしくお願いいたします」

良子とそれに付き添う瑠璃を見送り、簀子へ出た昭昌は拍手をひとつ叩いた。

「風華、おいで」

途端に風が吹く。やわらかな春風のように心地よく、穏やかな風。瞬きひとつで現れたのは、髪を二つに結わいた幼い少女だった。

あどけなく愛らしい面差し。髪は淡い檜皮色で、瞳も同じ色。白と浅葱色の布で作られた異国の服を身に纏い、ふわふわと宙に浮かんでいた。

「昭昌、よんだ？」

「ああ。兄上の所へ行って、大納言輔徒殿の一の姫につ

いての情報が欲しいと伝えてきてくれ」

「わかったー！」

外見通りの幼い言葉遣いで了承すると、風華の体は風と共に一瞬で消えた。

時刻はすでに黄昏を過ぎている。早くしなければ、貴子の体がもたなくなる。同時に市で聞いた女の鬼の事も調べたい。

「時間がないな」

苦笑して風華の帰りを待っていると、金色の空を切り裂くように飛翔する何かがあつた。まっすぐ昭昌の元へ飛んできたそれは、黄丹の小鳥。昭昌が差し出した手の上でひらりと一枚の紙に変わる式文だった。

中を見る前から、誰から来たか式文かわかる。黄丹は禁色、東宮にのみ許された色だからだ。

書かれていたのは久しぶりに会いたいという事と、先月の鬼女の件で聞きたい事があるという事だった。

東宮、敦幸親王は今上帝の同母弟にあたる。

母君は伊勢神宮で齋宮だった皇族の姫君で、そのせいか、生まれつき不思議な力を持っていた。

ひとつは予知夢。とは言っても、すでに起こった事の真相を見る場合もある。

もうひとつは真実を見抜く力。どんな術でも見破ってしまう。

内裏は策謀や陰謀が渦巻き呪詛が日々行きかう魔境である。その中で呪詛を見抜く力を持った敦幸は周りの人間から畏怖されていた。

あれは人ではないのだと。魔性の子がすり替わったのだと。心無い言葉で傷つけられた敦幸は母親にも疎まれ、

元服するまで祖母の暮らす伏見の山奥で育った。

敦幸にとって昭昌は弟のような存在であり、かけがえない友人である。その事を知るがゆえに、昭昌はすぐさま内裏へ向かうことに決め、邸を後にした。

東宮の暮らす綾綺殿まではいくつもの門を通らなくてはならない。いかに文を見せようともその手順は変わらず、結局綾綺殿に辿り着いた時にはすっかり夜になっていた。

「東宮様、安倍昭昌殿がいらつしやいました」

十二単を纏った女房に案内された部屋の中で、敦幸は書物を読んでいた。

「ご苦労様」

女房がいなくなるとにつこり微笑んで本を閉じ、円座に座るよう促す。

「久しぶりだね、昭昌」

「敦幸様もお変わりなく」

屈託のない笑みを向けられて、昭昌も自然と微笑んだ。まるで男装した麗人のような美貌。烏の濡れ羽色をした黒髪は結つことなく下ろされ、女性的な美貌に加えてやわらかな笑みを浮かべた赤い唇が、よりいっそう柔和な印象を与えている。

上質の絹で作られた萌黄色の狩衣を着崩していても、むしろ艶めいて美貌を引き立たせているだけだった。

本来は名前で呼ぶ事など許されないが、敦幸たつての希望でそう呼んでいる。そのかわり敬語をやめて欲しいというのは大目に見てもらおう約束だった。

「手紙は届いたかな。君に教えてもらったようにやったけど」

「はい、ちゃんと届きました。聞きたい事はなんですか？」

ふつと口元から笑みを消し、敦幸は夜よりも深い瞳で昭昌を見つめた。

「夢を見たんだ。蓮の香りのする女が、都を滅ぼすという夢。そしてその後、君が鬼女を人に戻す夢をね」

本当は鬼女を退治してはいないのだろうか。と訊ねられ、昭昌は言葉を失った。

「……さすがは敦幸様ですね。その通りです。私はあの鬼女を退治してはいません」

「その詳しい話が聞きたいんだ。夢で見る限り、あの蓮

の香りがする女が何か関わっていたようだけど」

敦幸に嘘や偽りは通用しない。他言無用と前置きをしてから、昭昌はすべてを話した。

鬼女は捨てられたと思い込み、恋人を探していた事。

そのきつかけを作り、鬼女に仕立て上げたのがその運の香りのする女だという事。

鬼女に仕立て上げるほかに、妖を使役している事。

そして蓮香と名乗った女の狙いが、この都を滅ぼすという事。

すべてを黙って聞き終えた敦幸は、そうだったのか、と小さく頷いた。

「その蓮香という術師も、誰かに裏切られたのだろうな」「おそらく。この都でも有力な貴族に関わっているのしょう」

蓮香は男などみな裏切ると言っていた。それが都を滅ぼそうとする理由ならば、その裏には貴族に対する憎しみや怒りがあると考えるのが自然だった。

「それで、昭昌。何か手立てはあるのか？」

「今はまだ、何も。最近現れたという幽鬼に関わりがあるのではと思っはいますが、何の確証もありませんし」

「ああ、『内裏に』とだけ言う女の鬼か。貴族達が震え上がっていたよ」

くすくすと楽しげに笑う敦幸。その様子に思わず昭昌も笑顔になる。

「昭昌、ただいま！」

和やかに会話をしていると、風華が姿を現した。初めて会った時に式だと紹介してあるので、敦幸も驚きはしない。

「えつとね、大納言の一の姫の事なら東宮に聞くのが一番確実だぞって言われたよ」

「……え？」

驚いて敦幸を見ると、敦幸も目を丸くしていた。

「大納言のつて……貴子の事か？」

「あ、そうですね。あの……一の姫の事をご存知ですか？」

「ああ、もちろん。お婆様の所にいた時から知ってる」

「嫌な予感を覚えつつ、昭昌はさらに問いかける。」「……文のやり取りとかは」

「今でもしているね。それが、どうかしたのかい？」

予想通りの答えに、昭昌は思わず頭を抱え込んだ。なるほど、頑なに拒むはずである。帝に嫁げば恋しい男が弟になるのだ。すぐ傍にいるのに触れられず、いつか惚れた男が誰かと結婚するのを間近で見たいなければならなくなる。

そんな生活をするかわかっていて嫁ぐ気になれるはずもない。白蓮尼という尼にすぎるのも無理ない事だった。そう考えながら、昭昌はふと疑問を覚える。

「敦幸様は、一の姫が入内する事をご存知ですか？」

訊ねると、敦幸は目を見開いたまま凍りついた。

「え……?」

「今日二の姫に姉を助けて欲しいと頼まれたんです。すつかりやつれきつているとか」

「そんな話、知らない……」

本当に知らないらしく、何度も首を振る敦幸。

「そう、か。入内するの……」

さみしげな、けれど諦めたような言葉に顔を見ると、敦幸は辛そうに微笑んでいた。

「兄上が相手じゃ勝ち目ないな……」

「敦幸様……」

帝に歯向かうという事は、最悪の場合死を意味する。それは実の弟でも変わらない。

なんと声をかけていいのかわからなくなった昭昌の鼻孔を、甘やかな花の香りがくすぐった。

覚えのある香り。梅でも桜でもない香り。

その香りの正体に気づいた瞬間、昭昌の顔から表情が消えた。

「……昭昌?」

「お静かに。どうやら、例の幽鬼がこの辺りまで来たようです」

そう言つと同時に、大内裏から悲鳴が響いた。

白い煙を人の形にしようとするればこうなるだろうか。

霞のように揺らめき輪郭を変える幽鬼。その後ろには生氣を取られて倒れ伏す武士や貴族の姿。

風華に内裏の見回りを言いつけ、駆けつけた昭昌の目に映つたのは、まさにそんな状況だった。

「酷いな……」

呪符を構えつつ辺りを見回し、倒れ伏す人の数に唇を噛み締める。

男も女も身分も関係なく倒れる人々の数は、ざっと十数人。早くこの場から幽鬼を退けなければ命が危ない。

「……を」

幽鬼から、微かに声が漏れた。何かを探すようにうろと彷徨つ。

「……ま」

切れ切れに届く声は、誰かを探しているようだった。

「誰を探しているかはわからないが、多くの人々に害を与えた事はまぎれもない事実。消えてもらう!」

しかし、今にも符を投げようとした腕は、後ろから押さえ込まれた。驚いて振り向けば、追いかけてきたらしい敦幸が、呆然とした様子で昭昌の腕を押さえている。

「敦幸様、何を!」

「……貴子?」

昭昌の抗議など耳に入らない様子で幽鬼を見つめる敦幸。その口から零れた名前に、昭昌も驚いて抵抗をやめ

た。

「敦幸様、今なんて……？」

二人の見つめる先には、頂垂れたような幽鬼の姿。

「……き……」

小さく呟くと同時に、その体は揺らめいて消えた。

後に残るのは甘い蓮の花の香り。そして、最後に呟かれた言葉。

敦幸様

「……かこ、どうして……！」

力なく呟く敦幸を見上げ、昭昌は声をかける。

「……敦幸様。私は、あの幽鬼を追います」

悄然とした敦幸に噛み含めるよう言い聞かせる。

「あの幽鬼が一の姫……貴子姫なのか、私にはわかりません。けれど敦幸様がそう思うならきつとそうなのでしよう。彼女はあなたを探してここまで来たんです。だから」

自分の気持ちに、嘘はつかないで下さい。

今上帝や都や、東宮として考えなければならぬ事はたくさんあるだろうけれど、自分の気持ちを隠して納得して欲しくはない。

それは昭昌の、友としての願いだった。

「きつと、貴子姫はあなたを待っていると思います」

そう言って、昭昌は幽鬼を追うために走り出した。

「風華、大納言邸まで風を起こしてくれ！」

「了解！」

やわらかな風が昭昌の体を包み、瞬く間に大納言邸へ辿り着く。

そのまま敷地へ降り立てば、気配を感じて瑠璃が駆け寄ってきた。

「昭昌！」

「瑠璃、香は手に入った？」

「ええ、これでしよう？」

紙に包まれた少量の香は、まだ火にもくべていないのに甘くほのかに蓮の花の香りをさせていた。

「今、また一の姫から白いのが出て行ったわ。戻って来たばかりだったのに」

やはり内裏に出た幽鬼の正体は貴子だったようだ。

「瑠璃、俺は一の姫を助けに行ってくる。裏であの女が手を引いているみたいだ。この邸は瑠璃に任せて大丈夫か？」

「ええ、わかったわ。気をつけて」

簡単に会話をかわしていると、良子が顔を覗かせた。

「昭昌殿？」

「あ、二の姫。ちょうどよかった、白蓮尼がどこに住んでいるかわかりますか？」

「あ、ええと。右京の捨てられた寺だと聞いているわ」

「寺ですね」

右京に誰かが隠れられるような寺はそう数がない。

片端から蓮の花の香りを探せばすぐに見つかるだろう。

「あの、昭昌殿。お姉様は……」

「これから助けに行つてきます。瑠璃、後は頼んだ」

「任せて、昭昌。いつてらっしゃい」

心配そうな良子に寄り添い、瑠璃は笑顔を見せる。対する昭昌も笑みを浮かべて頷くと、拍手を打ち白銀の狼を呼び出す。

「銀、蓮の香りを追つてくれ」

「わかりました」

銀は昭昌が背に乗ると力強く地面を蹴り、右京へ向かつて走り出した。



自室に戻った敦幸は、ずっと考え込んでいた。

「貴子……」

まぶたを閉じれば色鮮やかに浮かぶ、満面の笑みを浮かべた幼い少女の姿。

「ゆき兄さま」

そう言つていつも後を追つてきた。

異形を見るがゆえに父に疎まれ、乳母や侍女は後の憂いを晴らそうと襲つてきた妖から自分を庇つて死んでいく。

だから、敦幸はいつしか他人と関わらないようにしていた。もう親しい人が目の前で死んでいくのはいやだった。それくらいなら、独りぼつちのほうがまだと。

なのに、子供時代を祖母の下で過ごしたあの頃、同じく祖母に預けられていた幼い貴子は、なんと言おうが敦幸の傍にいた。いつもいつも近くで笑っていた。

一人はさみしいからと傍にいた。

京に戻つても文のやり取りを続け、会えなくなつてもこまめに連絡は取り合っていた。

そして、妹のように思つていた貴子を、いつしか一人の女性として愛するようになっていた。

いや、本当は昔から好きだったのだ。初めて出会い、笑いかけてくれた時から、ずっと。

自覚した途端、敦幸の唇に自嘲の笑みが浮かんだ。

「……私は、愚かだな」

あの微笑みを手放す事がどうしてできるだろう。

『どうか、自分の気持ちに嘘はつかないで下さい』

年下の陰陽師の、利発な友人の言葉が耳に響く。本気で自分を案じて、必死に言葉を探していた昭昌の顔を思い出し、敦幸はやわらかく微笑んだ。

「そっだな」

貴子は誰にも渡さない。たとえ相手が今上帝で実の兄弟としても。

そんな決意を胸に、敦幸は帝の住む紫宸殿へと歩き出した。

「ここから一番強く蓮の花の香りがします」

そう言っただけで足を止めたのは、良子の言う通りだ。朽ちた寺の前だった。

敷地に一歩足を踏み入れれば、むせ返るような蓮の香りとおぼろげとした妖気。

それにかまわず進んでいくと、裏庭に立ち尽くす幽鬼と、その傍にたたずむ尼僧の姿があった。

白い布で頭を隠し、質素な青みの強い蘇芳の衣を身に纏っている。昭昌からは後姿しか見えないが、それが誰なのかはとくにわかっていない。

「あんたが、この幽鬼を操っていたんだな。入内に苦しむ心の隙をついて。そうだろう？ 蓮香」

昭昌の声に、尼僧はゆっくりと振り向く。切れ長の官能的な瞳に、濡れ濡れと艶かしい赤い唇。艶やかな美貌を持つ女。蓮香は、昭昌を見ると微笑んだ。

「あら、また会ったわね。可愛い陰陽師さん」

「そっよ。幽鬼になる手伝いしたのはわたし。でも、その理由はもうわかってるのでしょ？」

「ああ。入内が嫌だった一の姫を幸せにするためだった、とでも言うんだらう？」

「さすがね。じゃあ、邪魔しないで頂戴。彼女はこれから帝を殺しに行くのだから」

笑みを含んだ声に、ぞくりと背筋を冷たいものが走った。

「帝が死ぬのは、入内しなくてすむ。だから殺しに行くの。簡単な事だと笑う蓮香に、昭昌は痛みを孕んだまなざしを向けた。

「何であんたはそっやって恋をしている女ばかりを狙うんだ？」

「わからないの？」

蓮香は慈しむように幽鬼を見つめた。

「この世でもっとも強い力は愛でしょう？ その力を陽とするなら、陰の力もあるのがこの世の理。そして、愛

の対極にあるのは」

「憎しみか？」

「いいえ、違うわ」

貴子を見つめたまま、蓮香は艶やかに微笑む。

「絶望よ」

やんわりと告げられた言葉に、昭昌はきつく下唇を噛み締めた。

「愛があるから絶望する。その人を深く愛していればいるほど、その絶望も大きくなる」

だから、と蓮香は幽鬼へ手を伸ばす。

「わたくしはその絶望を使って、この都を滅ぼすの」

他のどれよりも強い負の力。時がたてば怒りは収まり、悲しみは癒えるが、絶望は希望がない限り変わる事は無い。そして深い絶望であればあるほど、希望の光はほんの僅かになり、心に届きにくい。

「だけど、絶望には希望がある」

負から正へ。陰から陽へ。すべてを入れ替える希望が、どんな絶望にも必ずある。

「俺は諦めない。必ず希望を示してみせる」

「甘いわね」

蓮香は妖艶な笑みを浮かべた。

「わたくしの邪魔はさせない。この姫は自ら絶望を望んだのよ。希望など、何の意味もないわ」

「それはどうかな」

涼やかな声が響く。驚く蓮香に、昭昌は口の端を吊り上げて見せた。

「やっと来ましたね」

「遅くなつてすまない」

月明かりに浮かぶのは、白い狩衣を纏った敦幸の姿。

長い黒髪を風になびかせ、口元には柔らかな微笑を湛えている。

その瞳は一瞬昭昌を捉え、すぐに幽鬼に向けられる。

「貴子……」

伸ばされる腕。凍りついたように動かない幽鬼に触れ

ようとす指先。

「……………いやああ　　っっ！」

今にも指先が触れようとした瞬間、幽鬼は絶叫を上げて飛びずさった。

「貴子！」

「見ないで、見ないでえ　　っっ！」

耳を塞いで全身で拒絶し、喉の奥から悲痛な悲鳴を上げ続ける。

叫べば叫ぶほど霞んでいく輪郭。そのまま虚空に散じてしまいそうに歪んで崩れていく。

「わ、私を見ないで下さい。私はもう、人ではないのです。あなたを愛した貴子はもういない、私は、もう……」

「もう、いい」

泣きじやくるように身を縮める幽鬼を、敦幸は今度こ

そ捕らえる。触れ合う所から生気が奪われる事にも構わず、これ以上崩れないように腕の中に閉じ込める。

「もういい……不安にさせて、悪かった……」

全身から力が抜けていく感覚。それでも幽鬼を抱き締める腕の力は強くする。

「兄上に、ちゃんと話してきた。大納言にも頼む。貴子を私の妻に欲しいと」

「敦幸様……」

ゆっくりと、幽鬼の輪郭がはつきりしていく。現れるのは良子に似た面差しの、けれど大人びた美貌を持った少女。

涙で潤む瞳で見つめる様子はあまりにも儂く、おすおすと微笑む姿は可憐だった。

「愛してる」

だからもう、泣くな。そう言われた少女は何度も頷く。その様子を愛おしそうに見つめ、敦幸は優しく微笑む。

多少の倦怠感が残るものの、すでにあの力が抜けるような感覚は消えていた。

「私も愛してます……」

少女は穏やかに微笑み、敦幸の胸に頬を寄せる。その体は透き通る光となり、淡く輝いて消えた。

後にはほのかに赤みを帯びた蓮のつぼみが残るばかり。「昭昌、これで貴子は体に戻ったのか？」

「ええ、もう心配ありません。後は……」

昭昌の視線の先には、今にも泣き出しそうな蓮香の姿があった。

「何で……？ 何でみんなまた傷つこうとするの？ 信

じなければ傷つかずにすむのに、どうして……？」

「それが恋だから。傷つけて、傷ついて。それでも共にいたいと願うのが恋だから」

敦幸がそう言つと、じゃあ、と蓮香は痛みを堪えるような笑みを浮かべた。

「両親を、妹を、仲間を殺されたわたくしが同じ目に合わせようとしても、何の文句も言えませぬわね」

そう言った瞬間、二人の周りを妖が取り囲んだ。「死ねばいい、次にこの国を統べる者も、わたくしの邪魔をする陰陽師も！」

憎しみの言葉と共に扇を振りかざすと、妖がいつせいに飛びかかってきた。

「銀！ 風華！」

叫びつつ、昭昌は袂から取り出した符を妖に投げつける。すぐさま現れた銀は敦幸を守りながらその爪と牙で、

風華は風の刃で妖を蹴散らす。

「望みのものは手に入れたし、今日のところはこれで勘弁してあげるわ」

戦いの中、聞こえてきた声に視線を動かせば、いつの間にかあのつぼみが蓮香の手の中にあった。「今度こそ、この都を滅ぼしてやる」

そう言い捨て、蓮香は再びその姿を闇の中へ消した。

なっていくのを覚える。

自分の気持ちに、嘘はつかないで下さい。

自分の言葉が耳に甦る。

「そうだな……」

そろそろ自分のこの気持ちに、瑠璃を守りたい、愛おしいと思う気持ちに向き合わなければいけない。

ただ今は、隣で笑うこの温もりだけを感じていたかった。

「そろそろ帰ろうか」

「うん！」

さりげなく手をつなぎあい、二人はゆっくりと都を歩いていった。

数日後。いつものように夜の見回りをしていると、百鬼夜行と共にやってきた瑠璃とであった。

「昭昌聞いた？ 大納言様の二の姫が、今度入内するって」

「え？」

驚く昭昌に、やっぱり知らなかったんだと瑠璃は微笑んだ。

「なんでも、元々帝は二の姫が入内するんだって思ってたらしいの。だから全部うまくまとまったみたい」

「そっか……」

幸せになつてくれればいい。蓮香のように、信じられなくなるのは悲しすぎる。

ふと何気なく瑠璃の胸元に、あの首飾りを見つける。

「それ、つけててくれてるんだ」

「あ、うん。すごく嬉しかったし、それに……昭昌がいつでも守ってくれてる気がするから」

赤くなつて照れたように笑う瑠璃に、昭昌も顔が熱く